Short ショートコメント ★★★

トゥモロー・モーニング

2022 年／イギリス映画
配給：セテラ・インターナショナル／110 分

2022（令和 4）年 12 月 29 日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２２－１４６

監督：ニック・ウィンストン
脚本・音楽：ローレンス・マーク・ワイス
出演：ラミン・カリムルー／サマンサ・バークス／フラー・イースト／ジョージ・マグワイア／オリバー・クレイトン／ジョーン・コリンズ

みどころ

『ウエスト・サイド物語』（６１年）、『サウンド・オブ・ミュージック』（６５年）以来、私はミュージカルの大ファンだから、「世界最高峰のミュージカルスターが贈る、極上のミュージカル・エンターテインメント！」「ロンドンを舞台に、“結婚前夜”＆“離婚前夜”の男女に訪れた＜出会い＞の奇跡」という謳い文句を見れば、こりゃ必見！

結婚前夜と離婚前夜の対比は、自分自身としても、また５０年近い弁護士業務の中でもいろいろと見分けてきた。しかし、ミュージカル映画でそれをどう描き、どう表現するの？そんな期待で座ったが、アレレ・・・？

歌はいいけどストーリーは全然ダメ。この夫婦の離婚原因はナニ？しかも、ラストでの大転換は一体ナニ？ミュージカル映画でも、やはりストーリーは大切にしなくちゃ！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆私は中高校生の時に『ウエスト・サイド物語』（６１年）、『サウンド・オブ・ミュージック』（６５年）を観て、ミュージカルの魅力にハマってしまった。そのため「世界最高峰のミュージカルスターが贈る、極上のミュージカル・エンターテインメント！」「ロンドンを舞台に、“結婚前夜”＆“離婚前夜”の男女に訪れた＜出会い＞の奇跡」と謳われているこんなミュージカル映画が公開されると聞けば、こりゃ必見！

チラシによると、「２０１３年に日本でも石井一孝、島田歌穂、田代万里生、新妻聖子といった実力派キャストで上演され話題を呼んだ。」と書かれているから、島田歌穂、新妻聖子のファンとしても、こりゃ必見！

◆そう思って、ネット資料を集めてみると、アレレ、アレレ・・・。サイトによると、「好きだった人もこれから見る人もいるのにわざわざ not for me だった理由をつらつら書かなくてもいいとは思うんだけど、たぶんもう見返すことはない映画なので数年後に記憶が薄

れて『一回見たけどなんかつまんなかったよな』の印象で終わるより、自分としては何がつまんなかったか記録しておきたいんだよな。特にミュージカル映画は日本で公開されたものはできるだけ全て見ようとしているので自分のデータベースとしてもメモしておきたい。ということで面白かった人やこれから見る予定の人は自衛してね。」と書かれている。さらに、「２人の歌声は期待通りに良かったし住んでいるフラットも素敵だった、けど、それ以外が全っ然刺さらなかった――というか正直見ていて苦痛な時間も結構あった・・・。」「どういう理由で離婚に至ったのかもわからないし、ずっと喧嘩 or 葛藤していてストーリーの進展が無いのに結論は『子は鎹』みたいなオチでいいの？って感じだし・・・。」等々と書かれ、かなり評価が低い。そのため大いに迷ったが、やっぱり自分の目で確かめなくちゃという思いで鑑賞！

◆しかし、残念ながら私の評価もサイトの記事と同じだった。結婚前夜と離婚前夜で２人の思いが両極端になっているのは当然だから、それを対比するのは面白いし、それを映画のテーマにすれば、いろいろな切り口が考えられる。しかし、その両者を適当にクロスさせながら歌うだけでは、全然ミュージカルとしての面白さはない。『ウエスト・サイド物語』は２つの若者グループの対立の中での恋物語がスリリングだったし、『サウンド・オブ・ミュージック』は、あの時代における、あのファミリーのあの生き方が興味深いうえ、あんな形でラブストーリーが成立していく意外性が素晴らしかった。

　ところが本作では、結婚前夜は希望に満ち、この瞬間を永遠に忘れないと気楽に約束しているだけだし、離婚前夜はとにかくすべてが食い違ってしまった２人の夫婦ゲンカの姿にあ然。そんな状況には納得だが、サイトでも言っているように、なぜそうなったの？その説明が全くないから、説得力が全然なし！

◆まあ、それでも、実力家の歌手が集まっているから、歌は素晴らしいものばかりだ。近時私は BS 放送の歌謡番組をよく見ているが、そこではカラオケの TV 画面と同じように、歌手が歌う曲に対応して背景をいかにうまく作り出していくかが１つの勝負になっている。本作は、それに比べるとかなり上のレベルだが、それだけで上質の映画になるはずがないのは当然だ。しかも、最後に最も納得できないのは、なぜここまで破綻した２人がヨリを戻して終わってしまうの？そんな馬鹿な・・・。

２０２３（令和５）年１月５日記